東日本大震災における日本赤十字社広島県支部救護班第4班の活動報告

野村 裕* 有馬 準一* 中野 壮一郎*
 田中 孝幸* 柳澤 義和* 城戸 聡*
 堀田 謙介* 幸山 敦子* 大賀 正義*

A Report of Medical Activity of 4th Rescue Team of Hiroshima Branch of Japan Red-Cross Society after the Great East Japan Earthquake

Hiroshi Nomura*, Junichi Arima*, Soichiro Nakano*,
 Takayuki Tanaka*, Yoshikazu Yanagisawa*, Satoshi Kido*,
 Kensuke Hotta*, Atsuko Kohyama*, and Masayoshi Oga*

日本赤十字社広島県救護班班長として、東日本大震災の被災地で活動したので報告する。平成23年3月20日から24日までの5日間、宮城県石巻市に派遣され、石巻専修大学に設置された災害救援用移動式仮設診療所を拠点とした医療奉仕に従事した。石巻赤十字病院に設置された本部の指揮下に活動した。活動内容は、仮設診療所での医療活動、避難所への巡回診療および被災地での周辺聞き込み調査であった。仮設診療所にレントゲンや採血の測定器はなく、理学所見に基づいて診療を行った。患者内訳は3月17日から19日と比較して、我々の活動時期では呼吸器系疾患が増加していた。避難所では認知症の患者の介護負担が最も重かった。医療救護活動タイムスケールによると、我々が派遣された時期はphase 2に相当する。被災地での問題点は刻々と変化するため、原地で収集した情報に基づき、次に生じる問題を予測することが重要であった。

We report our experience as the 4th rescue team of the Hiroshima branch of the Japan Red-Cross Society after the Great East Japan Earthquake on March 11, 2011. Under the direction of the command post in Ishinomaki Red Cross Hospital, our team volunteered for medical activities at a temporary clinic set up as the domestic emergency response unit at the Ishinomaki Senshu University in Ishinomaki-shi, Miyagi Prefecture from of March 20 to 24, 2011. Our main tasks were providing medical examination for flood victims both in the clinic and other shelters, and survey of the disaster areas. According to patient records from March 17 to 23, there was a tendency for increased respiratory disorders in a time-dependent manner during this period. At the individual shelters, nursing care for old patients with dementia was the gravest burden for the care givers. Since urgent problems in disaster areas vary all the time, it is important to anticipate arising new problems based on the surveyed information collected on-site and on-time.

Key words: Great East Japan Earthquake (東日本大震災), rescue team (救護班), Japan Red-Cross Society (日本赤十字社)

はじめに

平成23年3月11日に発生した東日本大震災は、マグニチュード9.0の地震とそれに連動した大津波によって、東北・関東地方を中心に未曾有の被害をもたらした。日本赤十字社広島県救護班班長として、平成

23年3月20日から24日までの5日間、宮城県石巻市に派遣され、石巻専修大学に設置された災害救援用移動式仮設診療所を拠点とした医療奉仕に従事したので報告する。

* 広島赤十字・原爆病院整形外科 Department of Orthopaedic Surgery, Hiroshima Red Cross Hospital & Atomic-bomb Survivors Hospital, Hiroshima, Japan

活動報告

仮設診療所での活動は石巻赤十字病院に設置された本部の指揮下に、高松赤十字病院と共同で行った。主な活動内容は、仮設診療所での診療、避難所への巡回診療および被災地の周辺聞き込み調査であった。仮設診療所での医療活動は軽症者の診療が中心であった。レントゲンや採血測定器はなく、診療は理学所見と簡単な医療機器を用いて行った。3月17日から23日までの患者記録に基づき、同時期に仮設診療所および巡回診療時に診察した患者総数と疾患名（表）を集計した。1日平均117人（83-151人）の患者を診察した。循環器系と内分泌系疾患については、毎日飲んでいる薬が流されたため、処方希望して来院した患者がほとんどであった。この期間内では、呼吸器系疾患の割合が経時的に増加する傾向を認めた（表）。脱水や感染症などに対する補液および抗生剤の点滴数は、17日から20日の間では3件であったが、21日から23日の間では12件に増加した。17日から23日までに、喘息の重積発作や深部静脈血栓症の疑いなど、重症と判断して石巻赤十字病院へ搬送した患者総数は4人であった。各避難所では、徐々に衰弱してゆく認知症の高齢者とその介護が大きな負担であった。被災地での聞き込み調査では、経時的に変化してゆく現地での

ニーズを所定のアセスメントシートに書き込んだ。本部はこれらの情報を、現時点での問題点の解決と次に生じる問題の予測に利用した。

考察

日本赤十字社は、全国47都道府県に支部を持ち、91病院を擁する職員約5万人のNGO組織で、災害救助法などにより指定された公共機関である²⁾。災害救護活動が本来の使命とし、その特徴は、組織力を利用した迅速かつ継続性のある救助体制と自己完結型救助の実践である。日赤の災害救護活動の具体的範囲は、被災により機能を失った地元の医療機関に代わって「医療の空白」を一時的に埋めるものに限定している。

医療救護活動タイムスケールに基づく、我々が派遣された時期は、被害が少ない基幹病院や後方病院などに収容された負傷者に対し緊急治療が行われる段階で、phase 2にあたる。災害時には、それぞれのphaseに応じた活動が要求される¹⁾。実際、被災地での問題は刻々と変化した。そのため、原地で収集した情報に基づき、次に生じる問題を予測することが重要であった。また、避難所に残された認知症の高齢者の衰弱と介護者の疲労困憊は大きな問題であり、速やかに行政が介入し、遠隔の施設などへの移送が望まれた。

表：3月17日から23日において、仮設診療所および巡回診療時に診察した疾患総数に対する、個々の疾患の割合を示す。呼吸器系疾患の割合が経時的に増加する傾向を認めた。

ま と め

大災害を前に、個人個人は無力であるが、日本全国の基幹病院が一丸となって取り組むことで、被災された方々に少なからず貢献することが可能である。

参 考 文 献

- 1) Guha-Sapir, D., van Panhuis, W. G., Lagoutte, J.: Short

communication: patterns of chronic and acute diseases after natural disasters - a study from the International Committee of the Red Cross field hospital in Banda Aceh after the 2004 Indian Ocean tsunami. *Trop. Med. Int. Health*, 12(11): 1338-1341, 2007.

- 2) 石川 清: 被災地援助に求められるもの. *JIM*, 15(8): 644-648, 2005.